Japanese Association for Religious Studies

参照し、そこにおいて自然が意識的に、または無意識的にどのような位置を与えられ、どの程度の役割を果たしているのかの検討を行う。次に彼らの自然への言及全般を精査することを行い、神体験における自然の位置・役割と、いわゆる自然観がどのような関連にあるのかを探る。その試みにあたり重視しなければならない基準としては、①「我」に対する自然の内的・外的位置づけ、②歴史観、とくに終末論における自然の意義の確認、③聖典テキスト（本研究ではとりわけ聖書）の記述への参照性、ということを考える。

独歩は当初ワーズワースの影響下に、他者である自然と精神的交感を得ようとする志向が強かった。彼においては神を求める経路と自然を求める経路がほぼ一致していた。しかし二葉亭訳ツルゲーネフの自然記述に感動して自然を見る眼を更新し、創作に打ち込む中、やがてキリスト教からも離れる。晩年に至るまで彼は自然の愛好者であったが、その自然観は聖書と接続されることはなく、遂に神体験にも結びつかなかった。透谷の場合、神との出会いは内心の最奥の出来事とされた一方、神仙思想や幽冥の境地に魂の自由を求めることも多く、その視線は揺れていた。聖書の記述を等しく重視する立場にたち、創造・救済・終末論にも理解があり、自然を聖書の各所に結びつけて捉える記述も見られたが、聖霊の到来による神との一致に心ひかれ、十字架や復活の出来事は消えている。蘆花は前二者とは異なり、自覚的な神体験を三度経ている。そこでは大自然や田園生活が極めて重要な装置として機能しているのが目を引く。さらに、その後の彼の自然観察は聖書の記述と接続されることが多くなる。彼は精神革命を経て、失っていた聖書への信を新たにし、独自の表現を伴って復活とキリスト再臨思想に集中していくが、その過程で聖書を深く読み直すことにより、自然や宇宙の終末論的意義にも目を開かれていったとみられる。

このような三者の〈神との出会いにおける自然〉の諸相を比較すると、彼ら世代における三様の求道と創作の連関が示される。独歩は創作が軌道に乗ると、自然よりも人生模様に関心を示し、自然が後景に退くにつれて、自然と同方向に認められた神への意志も減退した。「驚異哲学」を支えた自然や神への関心は、生や死の現実味に置き換えられている。透谷は、その聖書への信と知を十分に創作に生かさず、遂にそれらは創作のモチーフと分離したままに見える。重視した聖霊との決定的出会いは果たせず、晩年は東洋的な精神の自由（自然との合一）へと傾斜した。蘆花の場合、神体験と懺悔告白により、神探求の精神が創作のそれを取り込んで一本化した。神の被造物である自然の事柄は、聖書の創造論や終末論により理解され、その上で農の生活を形作る必須物として経験され、親しまれた。

山村暮鳥のキリスト教思想

岩野祐介

山村暮鳥は言うまでもなく大正期を代表する詩人であるが、日本聖公会の伝道師でもある。一般的な文学史研究からも、また日本聖公会史研究からも、これまでキリスト者としての山村

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

が積極的に評価されることはほとんどなかった。そのような研究状況にあって画期的であったのが、中村不二夫による『山村暮鳥論』（のちに『山村暮鳥―聖職者詩人』として再刊）としてまとめられた一連の研究である。中村以降、山村のキリスト教思想研究に関して、目立った進展はないように思われる。

そこで本発表では、山村のキリスト教思想の内実を明らかにする。山村のキリスト教理解は、内村鑑三の無教会主義とも相通ずる面をもつ特徴的なものである。

山村は、「絶対なるものに種類や儀式はない」と考え、イエス・キリストが求めるのはただ愛の実行であると主張し、教派性や教理にこだわり、組織性を重んずる教会に対して厳しく批判している。山村にとって宗教とは生命であり真理であった。そしてそれは、イエス・キリストとの霊的交流を経て受け取られるべきものであったのである。山村によれば、キリストの福音とは人間を徹底的に解放しほんとうに人間らしくさせるものであった。山村は述べる。「実にキリストはこの唯一の人間解放者でありました。」「彼においてはじめて人間はその人間としての真価をみとめられ、それを発揮せられたものと言はねばなりません。」（小説『十字架』より）

このような視点をもつ山村にとって、ミッションと宣教師に指導された日本の教会、日本聖公会のあり方は彼の理想と大きく異なるものであった。山村は小説『十字架』の中で、当時の日本聖公会のあり方を厳しく批判している。日本聖公会は同時期の日本の教会と比較すると、教会員数に対する宣教師の数が多く、また山村が伝道師であった時期、教会を指導する立場の監督は宣教師で占められていたのである。概して日本生まれの教職者の地位は低いままであり、ミッションの側にはしばしば日本の状況への理解が欠けていることがあった。しかし同時に、山村は日本におけるキリスト教の必要性、その解放の福音の可能性に希望を持ってもいた。

それでは山村のキリスト教思想は、どのようにして形成されたのであろうか。山村と同じような神学教育を受けた須貝止が日本聖公会で主教になっているのであるから、神学教育に由来するものとは考えにくい。むしろ山村の日記・書簡類には、多くの読書記録や感想が述べられている。それらからキリスト教思想へのインスピレーションを得ていたのではないだろうか。特にドストエフスキーからの影響は大きかったのではないかと考えられる。また伝道師として東北から関東にかけて転々としていた山村は、地方部の人々の貧しく苦しい生活を目の当たりにしてきており、キリスト教によるそれら苦しみからの解放を真剣に求めるようになったと思われる。

以上のように教会のキリスト教に批判的であった山村は、それでは具体的にはどのような形でキリスト教信仰を実践しようとしていたのだろうか。イエス・キリストに解放を見出しながらも、山村は、直接社会福祉等に関わる社会的キリスト教に向かったわけではなかった。病気のため伝道師を解職された山村は、活動の中心を童話執筆においていた。病を抱えまた経済的に困窮していた山村には、執筆活動以上のことをする余裕がなかった。ゆえに独自に祈禱会を開くといった具体的行動が、彼には恐らく不可能であったのは残念なことである。あるいは、

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

童話の執筆を通して子供たちにキリストの解放のメッセージを伝えることが、山村の伝道であったと言うことができるかもしれない。

賀川豊彦の悪概念

ティッグ・リンドバーグ

本発表は、独創的な宗教家であり芸術家であった賀川豊彦（一八八八―一九六〇）の思想における「芸術としての悪」を考察するものである。発表の構成は、賀川の悪概念と宗教観を概略的に紹介した上、彼の「芸術としての悪」の観念をつぶさに分析する形になる。資料としては『賀川豊彦全集』を主なテクストとする。そうすることによって、古今の科学においても宗教哲学においても解明が困難な「悪」という問題について、賀川という一人の人間が大きな代価を払って構想した思想の意義が明らかになるものと思う。まさに自然災害や社会撹乱に苦闘している今日の状況において、賀川の「芸術としての悪」理解がその中に模索しながら生きて行こうとしている人々にとって何らかの手掛りになることを期待したい。

「悪」は、賀川豊彦が一生をかけて追究した第一の問題であった。彼の記述によれば「悪」は自身の宇宙目的論への思索の土台であり、そして発表者の考えでは、彼のキリスト教への帰依の主たる動機でもあった。逆境の中に育った賀川が、その悲惨と精神的な重荷からひたすら解放されることを希求したことは、容易に想像できるであろう。一個の自覚する生体を包んでいる宇宙には「果たして整然とした目的と意匠があるのか」と少年の賀川は自問自答したに違いない。自然界の目的論を拒むダーウィンの学説や古くから日本に深く根を張った仏教の因果説についても思索を巡らしたであろう。

生涯イエス・キリストの名を唱え続けた賀川であったが、彼独特の「目的論的な進化論」を断念することなく標榜したことは、彼の特色の一つと言わざるを得ないであろう。つまり賀川は、当時厳しく対立すると考えられていた科学と宗教とを相反するものと見るのではなく、相補うものとして見たのである。一方、常に進化する生命（賀川によればそれは生命が「伸び上がろうとする事」）には、不可避的に「ズレ」乃至は「故障」が生じざるを得ないと賀川は考える。しかし他方で賀川は、彼の深い科学の知見や聖書理解に基づいて、いわゆる「生命の最高の法則と見なされる〈連帯責任〉と〈贖罪愛〉」を構想していく。即ち、悪は生命の内容を構成し又進化させるという役割を担っているのである。論者の考えるところでは、賀川が「悪」を結局「芸術」と考えたのは、彼の理想主義と現実主義の相俟った結果なのである。

時には「警告」として、時には「酵素」として、「悪」はその「自己殿堂」に作用し、自我の脱構築と再構築という過程の手助けになる。このようにして、「警告」或いは「酵素」と表象される悪とその副作用である「苦」とは、信仰（とそれに伴う努力）と科学を通して宇宙の目的を確信したときにはじめて、ようやく「芸術」の世界に入り口となるのである。

NII-Electronic Library Service